

京都大学	博士(文学)	氏名	徐 男 英
論文題目	北朝期河北地方造像研究 ― 白玉像を中心に ―		
(論文内容の要旨) 本論文は、中国南北朝時代の北朝地域のうち、特に近年出土が相継ぐ河北地方の白玉像の造仏の様相について主に論じたものである。白玉像については、現在、河北、山西、陝西、山東地方から出土が報告されている。その制作の時期は、北魏から唐代までに至り、特に東魏から北斉期の作例が多い。地域的には河北地方が盛行している。白玉像研究は南北朝時代彫刻史研究の主流を占めてきた石窟彫像研究を補う意味で重要であるが、白玉像を総括的に取り上げた研究は現在のところ皆無といってよく、本論文は白玉像を主要な題材として論じた北朝仏教彫刻史研究として注目される。 本論文の構成は、本論文の目的と概要を述べた「序章」に続き、全五章からなる本文の各論と、本論文のまとめに当たる「結章」からなっている。以下、本論文の中核となる本文五章を中心にその要旨を記す。 第一章「北朝期白玉像の出土地とその地域的特徴」では、白玉像の研究史を整理し、中国における石材の地域別な分布に基づき、単独の石造像に反映された石材の地域性について検討した。白玉像の制作は、先に触れたように北魏から唐代まで行われたが、量的、質的な側面から北斉期頃に最も盛行したことが確認される。またそれらの出土範囲は、東は山東省の博興、西は陝西省の西安、南は河北省の臨漳、北は河北省の易県に定められる。この範囲は、地理的な環境から見ると、黄河の北部あるいはその周辺、また太行山脈の東麓の一帯に属す。中でも河北地方は曲陽付近に白玉の産地があることから盛んに制作が行われ、曲陽、臨漳、藁城、黄驊から多数出土している。また、その他の地域でも、山東省（無棣、青州、博興）および山西省（太原）出土の白玉像は、造像記に河北地方の地名が書かれている例が見られる。このことから、山東の作例については、河北地方との交流によって様式と技術が伝播した結果と推定することができるとした。これに対して、西安の場合は、河北地方から離れた地域ではあるが、唐代まで制作が盛んであった。そのため、西安付近における白玉の産出の有無が問題になるが、それについては今後の課題とし、ここでは西安出土の白玉像が浮き彫りで如来や菩薩などを表現するといった、独自の特徴をもつことを指摘した。本章では、さらに無紀年銘像や制作地不明の作例についても、制作地などの整理を試みた。 第二章「河北地方出土白玉像の制作背景 ― 北朝期太行山脈周辺の交通路の検討を通じて」では、第一章で論じた北朝期における白玉像の地域的特徴を念頭に置きながら、白玉像の分布の中心であった河北地方に考察の範囲を絞り、太行山脈周辺における交通路の検討を通じて、それと白玉像の出土地との関連性を分析した。まず、5世紀頃			

の河北地方における造像を概観し、この地域が周辺地域の造像や初期作例に見られる造像傾向を継承しつつ、一方で個性の強い様式や形式が育まれる環境であったことを確認した。特にこの地域において二仏並坐像が盛行したことは注目され、これが白玉像の双身像の成立に反映した可能性を指摘した。次に、河北地方の中でも曲陽、藁城、臨漳の三つの地域圏における白玉像の様式と形式を分類整理すると、曲陽と臨漳とでは様式上、形式上の相違が認められ、一方両地域の間に位置する藁城の場合は、臨漳出土像との類似が認められるとした。論者は、こうした各地域における造像の相違点や類似点を時代ごとの交通路の盛衰から説明することが出来るとした。すなわち、北魏前期には北魏の都平城と河北平原を支配するための拠点地であった中山城(現定県)までのルートが発達し、北魏太延2年(436)には平城から中山城までの直道である沙泉道(霊邱道)が開通された。曲陽における白玉像の盛行は、白玉の産地が付近に存在するという利点に加え、こうしたルートの繁栄と軌を一にすると考えられると推定した。また、藁城と臨漳出土像と類似性が認められる点については、東魏から北斉期において、晋陽(太原)と鄴(臨漳)を繋ぐ井陘路(常山路)の状況から理解することが出来るとした。すなわち、藁城は、常山郡(石家荘)の付近に位置するが、常山郡は東魏と北斉期に繁栄した井陘路(常山路)の要衝地であった。両都市間の往来に伴って臨漳で盛行した白玉像の様式や形式が伝えられたと推測した。

第三章は、「河北藁城出土の北斉河清元年銘白玉二仏坐像について―「弥勒破坐」銘の解釈を中心に―」である。1978年3月、河北省藁城県賈同村から14体の白玉像群が出土した。北斉河清元年(562)銘白玉二仏坐像(河北省正定県文物保管所所蔵)は、その中の一体である。本像は「弥勒破坐」という異例の銘文をもち、図像も二軀の遊戯坐如来像が表される特殊なものである。そのため、北朝期の弥勒図像を論じる際にしばしば取上げられてきたが、既存の研究においては銘文の解釈が尽くされていない点に問題があった。そこで本章では、この像の銘文と坐勢について新たに検討を加えた。最初に像自体の様式を検討しているが、河清元年銘像は、様式的には北斉期河北における典型的な様式を踏襲しているものとみなされるとした。しかしながら、基台部の小龕に表される尊像は、この期にしばしば見られる神王像ではない点、藁城という地域的特色も認められるとした。また、造像記の検討から、本像が藁城において賈氏一族を中心に造像されたことが明らかになった。このことから、当該期の民間信徒団体である邑義による造像の実態をしめす好例として本像の位置付けることが出来るとした。ところで、本像は左右対称に二軀の遊戯坐如来像を表すという稀有な構成をとるが、その尊格は、銘文に述べられる「弥勒」像と推定されるとした。そして、銘文中の「破坐」については、解釈が難しいところがあるが、「結跏趺坐をくずす」という意味と理解できるとし、論者は「弥勒破坐像」は遊戯坐形式の弥勒仏を指す語句であることを主張した。なお、本像と同形式の単独の遊戯坐如来像にも「弥勒」と題される例が見られ、中国北朝期の河北地方において遊戯坐が弥勒如来の坐勢

として理解されていた可能性を指摘した。また、本像のような遊戯坐形式の如来像は、6世紀末に弥勒坐勢が多様化する傾向の中で、成道直後の弥勒仏の一形式として捉えられたという解釈を提示した。

第四章は、「中国北朝期神王像の受容と変容について」である。本章では、河北地方の白玉像に表されたモチーフの一つである神王像を取り上げ、その図像の意味と特徴について考察している。北朝期に盛行した神王像については、唐代以降に表される八部衆に先行する守護神として位置づけられ、經典には護法善鬼の守護神として説かれることが既に指摘されているが、論者はまず北朝期における神王像を概観した。そして、初期の龍門や鞏県石窟での神王像は、漢民族の服装で表されるのが特徴とし、特に鞏県石窟の場合は、畏獣像や伎楽天と共に配され、多様な神王像が登場とした。その後、鄴付近で開鑿された石窟での神王像では、高い鼻や鬚を蓄えた顔、円襟の上着や長靴といった西域風の面相や服装へと変化するとした。さらに5体の白玉像を取り上げて形式上の諸特徴を論じ、特に東魏武定元年（543）銘の駱子寛等七十人仏五尊像（アメリカ、イザベラ・スチュアート・ガードナー美術館所蔵）に10体の神王像が尊名とともに表わされている点に注目した。すなわち、白玉像の神王像は、概ねここにみられる十神王像の種類に属すが、台座の背面から両側面にかけて計8体として表す傾向があり、これと唐代以降の八部衆の図像との関連性を指摘した。なお、ここで取り上げた白玉像の神王像が、服制や面貌表現といった点で、6世紀の鄴付近で造営された石窟の作例と類似することは注目され、両者に共通する西域風の要素は、北齊期に首都鄴において流行したソグド文化の影響など西域趣味にその背景を求めることが可能であると主張した。このほか本章では、神王像は、東魏、北齊期に河北地方を中心として盛んに制作されたが、西安では神王像と畏獣像が混交した図像が見られる他にはほとんど作例がないことにも注目している。このことに関しては、西魏、北周の保守的な造像傾向が関係しているとし、守護神を制作する際、神王像より伝統の深い畏獣像に求めようとする意識が強かったためと推定した。

第五章は、「中国六世紀における枝が絡み合う双樹表現について」である。ここでは河北地方の白玉像に特徴的な枝が絡み合う表現に注目し、計12体の作例を取り上げ論じている。同様の表現は、中国の北齊時期に数多く見られる。地域的には河北南部、山西東南、河南北部、山東北部に至っており、主に太行山脈東側および黄河流域北部の地域と言い換えられる。この表現が河北地方に限られないことが、まず指摘してきできるとした。また形式上の源流については、漢代の山東地域の画像石に、枝が絡み合うように表わされた扶桑が多く見られることに注目した。何故ならば、山東周辺地域には、樹木に対する強い信仰の伝統があり、それは齊に遡り、漢代を経て北齊時期まで保たれていたためであり、その伝統的な図像は、北齊期には山東地域よりは河北南部を中心とした地域で好まれたことが確認できるとし、これが枝が絡み合う双樹表現の背景にあると解釈した。なお、白玉像においては、双樹表現には透かし彫りの技

法が用いられる。これは、彫刻技法と石質との適合性という視点から理解できるとした。すなわち、それは北齊期に枝が絡み合う双樹表現が、山東地方より河北地方で盛行したこととも関わり、山西の砂岩の荒い石質や、河南と山東の石灰岩の堅い石質のものは、枝が絡み合った双樹の透かし彫りを施すのには適切ではなく、これに対して白玉は透かし彫りに適した石質であり、玉を加工する技術の伝統と相俟って、複雑な透かし彫りの表現が発展したと推定した。最後に本章の要旨をまとめ、河北地方に数多く見られる枝が絡み合う双樹表現は、山東地域の扶桑に由来する中国の伝統的な樹木に基づいており、それが北齊期に仏像に取り入れられた背景としては、樹木に対する信仰や仏教にしばしば登場する聖なる樹木のイメージと重ね合わされたためであることなどを想定することが出来るとした。

「結章」では、以上の検討によって理解された、北朝期河北地方における白玉像の造像傾向を振り返り、その特徴を列举し、

①河北地方の白玉像は、初期河北造像の伝統に立脚しており、その制作は民間の造像活動によってなされた。

②河北地方の白玉像の中には、他地方にはみられない特徴的な図像を表すものがある。

その端的な例が藁城出土の河清元年銘像である。この像の図像的特徴は、双軀を好む河北地方独自の形式的伝統が継承されたこと、また北朝末、図像が多様化し、遊戲坐が弥勒の図像として意識されるようになったこと、これらの要素が相俟って生まれたと解釈することができる。

③河北地方白玉像の中でも、上方に枝が絡み合う双樹表現、台座の神王像を表すといった特徴は、鄴（臨漳）付近を中心とした南部で盛行し、このことは北朝期の交通路をめぐる状況の変化が関わっている。

④河北地方白玉像は、観念的、彫刻技術面においても「玉」と密接に関わって発展した。

といったことをまとめてして見解を述べ、北朝期、特に東魏、北齊期の造像傾向を具体的に把握する一視点を提示した。さらに最後に今後の研究の展望に若干触れ、論を閉じている。

(論文審査の結果の要旨)

中国・南北朝時代の北朝彫刻史研究は、雲岡・龍門、響堂山といった石窟造像を中心に成され、これらいわば中央様式の彫像については精緻な議論が積み重ねられてきた。しかしながら、こうした石窟の造営は時期がかなり限定され、また関与するのが主に僧侶、貴族層に限られるところがあることに注意を払う必要がある。ところで、こうした研究の隙を補うのが、北朝時代を通じて盛んに造像され、当該期の民間信徒団体である邑義などによって造像された白玉像である。本論文は、北朝地域のうち、特に近年出土が相継ぐ河北地方の白玉像を中心に論じたものである。白玉像を概観しその問題点を論じていく研究は現在のところきわめて少なく、本論文は白玉像を主要な題材として論じた意欲的な北朝仏教彫刻史研究と言える。

本論文は、「序章」に続き、計五章の本文および「結章」からなる。中国北朝期の白玉像を概観した第一章もこの時期の白玉像の総括を試みた労作であるが、本論文の検討を通して得られた主要な成果は本文第二章から第五章で検討された以下の四点とみられる。

第一点は、白玉像の分布の中心であった河北地方の状況を考察し、太行山脈周辺における交通路の検討を通じて白玉像の製作の盛行や、様式等の類似性を明らかにした点である(第二章)。この検討によって、北魏前期には北魏の都平城と河北平原を支配するための拠点地であった中山城(現定県)までのルートである沙泉道(霊邱道)にある曲陽で、この時期に白玉像が多数制作された要因の一つが明らかにされ、また東魏から北齊期において晋陽(太原)と鄴(臨漳)を繋ぐ井陘路(常山路)の要衝地にあった藁城と、鄴の白玉像の様式等の類似性の背景を説明することが可能になった意義は大きい。

第二点は、藁城出土の北齊河清元年(562)銘白玉二仏坐像(河北省正定県文物保管所所蔵)を取り上げ、台座銘を分析し、北朝期河北地方の弥勒の坐勢について新見解を提唱した点である(第三章)。本像の銘記、特に「破坐」については、その判読や解釈については諸説あったが、論者は「破坐」と判読できることを明瞭に論じた。また、その語句の解釈については、なお検討すべきところがあるものの、「結跏趺坐をくずす」という見解を提示し、本像の中心二尊の尊格については遊戯坐をなす弥勒如来とした。この見解は、単に本像にのみ関わるものではなく、尊名の確定できない北朝期の半跏坐・遊戯坐をなす如来像の尊名比定にも影響を与える重要な指摘であり、今後の弥勒図像の研究に注目すべき提言をなした。

第三に、河北地方の白玉像に表された神王像を概観し、その図像意味と特徴を明らかにした点である(第四章)。特に、この地域の白玉像に、鄴付近の石窟彫像と同様、鼻や髭を蓄えた面貌や円襟の上着を着すなど、西域風の特徴が窺えるものがあることを指摘した点は注目される。論者は、こうした特徴は北齊期に都であった鄴において流行した西域趣味にその背景を求めるとし、さらにそれをソグド文化の

影響の問題とも関連づけることができることを指摘するなど、興味深い見解を提唱した。

第四に、河北地方を中心とした地域の白玉像に特徴的な枝が複雑に絡み合う双樹表現に注目し、その源流に関して新見解を提唱した点である(第五章)。こうした双樹表現については、すでに連理木に結びつける見解があったが、論者はこれを山東省などの漢代画像石に数多く表される扶桑と結びつく可能性を論じた。このような樹木に対する強い信仰の伝統が、漢代を経て北齊時期まで伝えられ、河北南部を中心とした地域の仏像制作に反映したとするのである。漢代画像石の樹木表現に由来するものが如何にして北齊の白玉像の造形に組み入れたかについては、なお検討すべきところがあるが、斬新な見解として注目される。

このように本論文は、各章の関連性は必ずしも密接ではなく、論文として統一性に些か欠けるところがあるが、北朝期河北地方の白玉像の多様な特色を明らかにし、随所に斬新な見解を提示したものとして評価される。しかしながら、提唱された見解の中には、「破坐」の解釈の問題など、なお慎重な検証を要求されるものも含まれている。また、文献史料の取り扱いなどについては、なお一考の余地がある。ただ、河北地方の白玉像研究は、本年3月にも鄴(臨漳)から3000片に近い数の出土が報告されたように、新出資料の報告が今も相継いでなされている。本論文は、このように新資料の整理に未だ追われているところがある河北地方の白玉像彫刻史研究を前進させる新たな試みとして評価でき、先の諸問題の克服については、論者のさらなる研究の進展を待ちたい。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2012年8月8日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。